

## ばら主体の施設花き経営

近年、切り花単価の下落傾向は引き続いており、ばら経営についても経営を圧迫している。

このような状況下においても、実栗郡安富町の北川友喜人氏（44歳）の経営は創意工夫にあふれ、先進的な取り組みがなされているので、ここで紹介する。

北川氏は昭和48年高校卒業と同時に花き栽培に取り組み、現在は安富フラワーガーデンにて、ばらを主体とした切り花経営を行っている。

### 規模

ガラス温室	6,600㎡	
ビニールハウス	4,200㎡	
露地	8,170㎡	合計 18,970㎡

品目はばら8,250㎡、しゃくやく5,000㎡、その他切り花5,720㎡である。労働力は、北川氏夫妻、父と常時雇用12名である。

### 1 経営の特徴

当地が中山間地域であり、気象・立地条件から少数品種の大量生産には向かない。そのため、北川氏は独自にマーケティング調査を実施し、市場や小売のニーズに対応している。そこで、ガラス温室については土耕からの改植が容易で、生育の早いロックウール栽培に転換している。これらのことから、常時30近い数の品種を出荷することにより、切り花単価の向上を図っている。また、平成9年より原種系品種であるイングリッシュローズの生産にも取り組み、市場より高い評価を得ている。

### 2 省力化への取り組み

以前はメーカー製の肥料を使用していたが、現在ロックウール栽培の培養液の作成は単肥混合で

行い、肥料代を1/3に削減している。また、自走式防除機を導入しており、労力軽減とともに、農薬危害の防止にも役立っている。

ヨトウムシの防除に黄色蛍光灯を設置し、終夜点灯することで、被害を半減させることができた。薬剤防除やフェロモントラップでの予察を併用して高い効果が得られている。

前述のように、少量多品種栽培を行っていることから、同一の培養液使用の弊害として品種により鉄欠乏の症状が現れる。そのため、含鉄資材の葉面散布を行い、被害を4割軽減できた。

### 3 高品質生産への取り組み

ばらについては、棟ごとに担当者を決め、常時雇用のパートさんが責任を思って管理し、随時研修も行い高い技術力を維持している。

### 4 今後の展開

雇用は主力のばら栽培のピーク時に合わせたものになっているが、昨年末より洋ランの試験栽培を行っており、今後は、労働力の平準化とともに、所得向上に寄与するものと期待される。

石上 佳次（山崎普及センター）



図：自家配合の培養液の検討

ひょうごの農業技術 No.106

平成11年11月1日（隔月刊）

1部250円（申込先 県立中央農業技術センター）

兵庫県立中央農業技術センター（0790）47-1117

兵庫県立北部農業技術センター（0796）74-1230

兵庫県立淡路農業技術センター（0799）42-4880